50. シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素

- 富山市中心市街地と富山地域を事例として -

Built Environment and Other Local Elements as a Source of Civic Pride

- A Case of Toyama City Center and Toyama Area -

伊藤香織*
Kaori ITO*

This study aims to elucidate what can be a source of civic pride and how built environment as a source of civic pride influences civic pride factors. Our methods and major findings are: (1) Investigation of the international literature reveals that built environment, culture and sport are regarded as typical sources of civic pride, while nature is not; (2) Questionnaire survey of Toyama shows that the people in Toyama City are most proud of the local nature and food; (3) A factor analysis of the questionnaire survey data shows “Built environment”, “food and nature”, “culture and industry”, and “transit” are the factors of source of civic pride in Toyama. A covariance structure analysis reveals that “Built environment” and “culture and industry” raise identity and attachment and “food and nature” raises attachment and desire for maintaining and reduces engagement.

Keywords: Source of civic pride, Built environment, Covariance structure analysis

シビックプライドの源泉、都市環境、共分散構造分析

1. はじめに

1-1. 背景と目的

シビックプライド（都市に対する市民としての誇り）の概念は、近年、都市政策において注目を集めている。シビックプライドは抽象的な情動ではなく、その都市やコミュニティのもつ何らかのもの・こと・場所などを拠り所にすることが多い。そのようなシビックプライドの源泉（source of civic pride）となる都市の要素を見出し、あるいは創り、市民が関与して磨き上げていくことは、シビックプライドの醸成につながっていくと考えられる。

伊藤¹⁾は、イギリスでは歴史的にも現代の都市政策においてもシビックプライドが都市環境（built environment）と結びつけられていると述べており、日本については今治市の事例から、都市環境の中でも特に中心市街地及び高評価有名地に対する評価がシビックプライドの特定の側面に影響していることを明らかにした。国内でシビックプライドの源泉について扱った研究はほとんど見られないが、地域という視点での既往研究では、自然（と関わる生活）²⁾、特産物³⁾、シンボルとなるまちづくりの取り組み⁴⁾、文化・歴史・伝統⁵⁾などが地域に対する誇りにつながるとされている。ここから、都市環境に限らず様々な要素がシビックプライドの源泉となり得ると考えられる。それでは、何がシビックプライドの源泉となりうるのだろうか。そして、その中でシビックプライドの源泉としての都市環境にはどのような特徴があるのだろうか。

本研究は、国内外の都市でのシビックプライドの源泉の傾向を捉え、その中で都市環境にはシビックプライドの源泉としてどのような特徴があり、どのようにシビックプライドを高めるのかを探るものである。併せて、都市環境以外のシビックプライドの源泉についても、その性質を捉え

ていく。

伊藤¹⁾は、イギリスでシビックプライドが都市環境の質と結びつけられていることから、都市環境への総合的な評価がシビックプライドのどのような側面に影響を及ぼすかを実証しているが、都市環境自体がシビックプライドの観点からどのような位置づけにあるかには言及していない。そこで、本研究は、伊藤¹⁾の方法や尺度に倣いつつ、より広く都市・地域に関わる様々な事物の中で、シビックプライドの観点から都市環境がどのように位置づけられるのかを明らかにするものである。また、本研究では、何が「シビックプライドの源泉」となるのかを探るために、価値の評価ではなく、様々な事物に対して市民として誇りに思う度合いを指標としている。

1-2. 研究方法

まず、シビックプライドの源泉に触れた海外の研究から、どのような要素がシビックプライドの源泉になり得るのかを抽出し、整理する。次に、日本の都市の傾向を捉えるため、富山市を事例として、プレアンケート調査を行い、市民として誇りに思う地域の要素を整理する（第2章）。続いて、対象とする富山市の都市環境事例を選定し、富山市の都市環境に対する評価、都市環境以外の要素に対する評価、シビックプライドの度合いについて本アンケート調査を行う（第3章）。それらの調査結果を用いて、都市環境及び都市環境以外の要素がシビックプライドにどのように結びつくかを、因子分析及び共分散構造分析によって明らかにして（第4章）、総括と展望を述べる（第5章）。

1-3. 対象地域

本研究では、富山県富山市を事例として、アンケートを中心とした調査を行い、実証分析を行う。富山市は日本の諸都市の中でも比較的早くからコンパクトなまちづくりを

* 正会員 東京理科大学理工学部建築学科 (Tokyo University of Science)

目指した政策を打ち出し、日本初の本格的LRTをはじめとする公共交通の再整備、公共空間の整備とネットワーク運営に向けた取り組み、公共建築物の再整備、再開発など、中心市街地の都市環境の再整備に力を入れてきており、2011年度まち交大賞国土交通大臣賞、2018年度コンパクトシティ大賞国土交通大臣表彰なども受賞している。一方で、広域では、富山湾と立山連峰という特徴的な自然環境に囲まれ、水と電力に恵まれた立地から産業基盤も充実する。このように、都市環境整備に特徴があり、その他のシビックプライドの源泉となり得る要素のバリエーションに幅があることから、事例として適したエリアだと考えられる。なお、本研究は必ずしも市の事業を対象とするものではなく、エリアとして富山市中心市街地及び富山地域を対象とする。

2. シビックプライドの源泉

2-1. 海外文献でのシビックプライドの源泉

シビックプライドの源泉の近年の傾向を知るため、2000年～2017年に英語で発表された研究のうち、具体的なシビックプライドの源泉（source of civic pride）に触れている箇所のある論文等から、当該部分を抽出し、シビックプライドの源泉の要素を整理した。ただし、歴史的な出来事を扱った研究や当該部分が引用部分である研究もあり、対象が必ずしも近年であるとは限らない。

表1にその結果を整理した。ここでは42の文献を取り

表1 海外文献におけるシビックプライドの源泉

要素	内容（地域）
建築	ランドマーク建築（米） ⁶⁾ 、アイコニックな建築（欧） ⁷⁾ 、文化財建築（欧） ⁸⁾ 、デパート（米） ⁹⁾
文化施設	美術館・博物館（英） ¹⁰⁾ （一） ¹¹⁾ （一） ¹²⁾ 劇場（中南米） ¹³⁾
公共施設	病院（英） ¹⁴⁾ （米） ¹⁵⁾ 図書館（英） ¹⁶⁾
オープンスペース	公園（英） ¹⁷⁾ 公園と公共空間（米） ¹⁸⁾ ガーデン（英） ¹⁹⁾ オープンスペース（欧） ⁸⁾
地区	ダウンタウン（米） ²⁰⁾ （米） ²¹⁾ （加） ²²⁾ 黒人地区（米） ²³⁾
インフラ	地下鉄（米） ²⁴⁾ 都市下水道システム（一） ²⁵⁾ 水道設備（中東） ²⁶⁾
学校	大学（英） ²⁷⁾ （米） ²⁸⁾
文化芸術	音楽祭（英） ²⁹⁾ パフォーミングアーツフェスティバル（豪） ³⁰⁾ パブリックアート（英） ³¹⁾
産業	工業の風景（加） ³²⁾ 最新医療（米） ³³⁾
スポーツ	野球チーム（米） ³⁴⁾ （米） ³⁵⁾ アイスホッケーチーム（米） ³⁶⁾ スポーツイベントやプロスポーツチーム（米） ³⁷⁾ 人気スポーツ（米） ³⁸⁾ 大規模スポーツイベント（一） ³⁹⁾ スポーツイベント（欧） ⁴⁰⁾
植物	街路樹（加） ⁴¹⁾ バラ（ア） ⁴²⁾
食	チーズ（欧） ⁴³⁾
その他	コミュニティキッチン（中南米） ⁴⁴⁾ マウンド（中南米） ⁴⁵⁾ ジオパーク計画（中東） ⁴⁶⁾ 壁画（中南米） ⁴⁷⁾

（英）イギリス、（欧）イギリス以外のヨーロッパ、（米）アメリカ、（加）カナダ、（中南米）中南米、（中東）中東、（ア）アフリカ、（豪）オーストラリア、（一）特定の地域ではなく一般

上げており（内、2種類の要素が記述されていたものが1件）、対象地域の内訳は、イギリス8件、イギリス以外のヨーロッパ4件、アメリカ15件、カナダ3件、中南米4件、中東2件、オーストラリア1件、アフリカ1件、特定の地域ではなく一般事象を扱ったものが4件であった。建築、施設、オープンスペース、インフラなど都市環境がシビックプライドの源泉として扱われることは多い。また、スポーツに関わる要素も多く見られ、特にアメリカでその傾向が強いことがわかる。また、アメリカを中心にダウンタウン地区をシビックプライドの源泉とするものも見られた。一方、イギリスでは、文化施設、公共施設、文化芸術などがシビックプライドの源泉として比較的多く扱われていた。また、全体として自然環境がほとんど見られないことも特徴的である。植物が2件含まれているが、街路樹とバラといういずれも人為的に植樹・改良されたものであり、食についてもチーズという人の手の加わった食材が取り上げられている。

歴史的に、イギリスのビクトリア都市の精神と言われたシビックプライドが、田園趣味や郊外化などの反都市文化によって20世紀を迎える頃に急激に放棄された⁴⁸⁾と言われているように、もともとシビックプライドは都市的な概念であり、人々が地域に関わり地域に介入することに関係している⁴⁹⁾ことから、自然環境そのものがシビックプライドの源泉として捉えられていないことの意味が理解できる。

2-2. 富山市での調査

それでは、日本の都市ではシビックプライドの源泉はどのように捉えられているだろうか。事例として前述した富山市を取り上げる。本アンケート調査の前段階として、富山市でのシビックプライドの源泉の各要素の代表的な事例を捉えるために、市民として誇りに思う地域要素に関するプレアンケート調査を実施した。

プレアンケート調査は、表2の要領で実施した。ここでは、海外文献で見出された要素を参考に、日本の既往研究で言及されている地域への誇りにつながる要素も考慮し、さらに一般に分かりやすい概念に変換して、建築、文化施設、オープンスペース、地区、交通機関、学校、文化芸術、イベントや祭り、産業、スポーツ、自然、食、産物、歴史遺産、その他を質問の要素とした。各要素について、「富山市民として誇りに思う富山地域の（各要素名）をお答えください」²⁾と自由記述で問うた。その中で、複数人が回答した事例を表3に示す。

表2 プレアンケート調査の概要

調査時期	2018年1月
調査対象	富山市内に居住する15歳以上のインターネット調査会社 ¹⁾ モニター
サンプル数	200人（男性122人、女性78人、最年少21歳、最年長78歳）
主な質問項目	回答者属性（富山市内居住年数、居住地区など）、富山地域の「選好・推奨・誇る」もの・こと・場所など

自由記述回答ながら、自然の「立山連峰」は200人中96人と最も多くの人が挙げた。次いで、オープンスペースの「富山県富岩運河環水公園」(78人)、イベントや祭りの「おわら風の盆」(74人)、産業の「製菓・売菓」(52人)、交通機関の「富山ライトレール」(48人)、スポーツの「富山グラウジーズ」(プロバスケットボールチーム)(35人)、食の「ます寿し」(35人)「魚・魚介類」(34人)と続く。食

については、個別の魚種を挙げた回答も多く、それらを「魚・魚介類」に加えると87人となり、立山連峰に次ぐ数となる。これらから、海外の文献では見られなかった自然や(加工食品ではない)食が非常に多く挙げられていることがわかる。

都市環境に当たる「富山県富岩運河環水公園」を78人という多くの回答者が挙げている。環水公園内にあるコーヒーチェーン店がSNS上で「世界一美しい」と語られると報じられており⁵⁰⁾、こうしたことも影響していると推察される。また、48人が挙げた富山ライトレールも、日本初の本格的LRTとしてしばしばメディアにも取り上げられており、視察も多いことが影響していると考えられる。これらから、外からの評価も誇りに影響していると考えられる。

プレアンケート調査から、都市環境以外の要素の代表的な事例として、おわら風の盆(祭り)、山王まつり(祭り)、製菓・売菓業(産業)、富山グラウジーズ(スポーツ)、立山連峰(自然)、魚介類(食)、ます寿し(食)、米(産物)、鋳物(産物)を本アンケート調査に用いることとした。

表3 富山市民として誇りに思う富山地域の事例

建築物	TOYAMA キラリ 24, 富山電気ビルディング 8, 富山県富岩運河環水公園, 環水公園内スターバックスコーヒー 各6, 黒部ダム 4, 富山県庁, 富山駅, 富山城, 新湊大橋 各3, 瑞龍寺, オーバードホール 各2
文化施設	富山県美術館 28, オーバードホール, 富山県水墨美術館 各11, 富山市ガラス美術館 7, 富山市科学博物館 6, 富山市立図書館, TOYAMA キラリ 各5, 富山県立近代美術館 4, 高志の国文学館 3
オープンスペース	富山県富岩運河環水公園 78, 富山城址公園 9, ファミリーパーク 3, 常願寺川公園, 呉羽山公園, 太閤山ランド 各2
地区	八尾 14, 富山県富岩運河環水公園 8, 呉羽, 立山山麓, 富山市 各6, 富山駅北, 岩瀬 各5, 城址公園, 五箇山 各4, 氷見市, 婦中町 各2
交通機関	富山ライトレール 48, 市内電車 36, 北陸新幹線 11, 富山地方鉄道, セントラム 各5, 富山空港 3, 黒部峡谷鉄道 2
学校	富山大学 29, 富山高校, 富山中部高校 各4, 富山医科薬科大学 3
芸術	ガラス工芸 18, おわら 11, 富山県立美術館 7, 富山県水墨美術館, 螢川 各3, 富山市ガラス美術館, 麦屋節, オーバードホール 各2
イベント	おわら風の盆 74, 山王まつり 11, 全日本チンドンコンクール 9, 富山まつり 4, 岩瀬曳山車祭, となみチューリップフェア 各2
産業	製菓・売菓 52, YKK 7, アルミ産業, 鋳物 各6, 農業 5, 漁業 3
スポーツ	富山グラウジーズ 35, カターレ富山 14, 富山サンダーバーズ 6, 富山第一高校サッカー部 4, 朝乃山, サッカー, バドミントン, スキー 各3
自然環境	立山連峰 96, 立山黒部アルペンルート, 山と海 各6, 山 5, 水, 称名滝 各4, 黒部ダム, 黒部峡谷 各3, 富山県富岩運河環水公園, 屋気楼 各2
食	ます寿し 35, 魚・魚介類 34, ブリ 26, 白エビ 18, ホタルイカ, 寿司 各9, 昆布 5, 刺身 4, 黒作り, 富山ブラック 各2
産物	鋳物 19, ホタルイカ 11, 白エビ, 米 各10, ブリ 8, ガラス工芸, 雷鳥 各6, 昆布 5, くすり 各5, アルミ製品, 魚, 呉羽梨 各4, ますのすし 3, 黒作り, 井波彫刻 各2
歴史遺産	富山城 16, 五箇山 10, 内山邸 4, 合掌造り, 瑞龍寺, 高岡大仏 各3, 反魂丹, 立山, 黒部ダム 各2
その他	富山県富岩運河環水公園, 方言, 立山連峰 各7, 水 6, 自然 4, アルペンルート, ます寿し, 山・海・川 各3, 海産物, おわら, 治安が良い・自然災害が少ない, 松川, 食べ物, 真面目で勤勉 各2

図中の破線は中心市街地活性化基本計画の範囲、番号は表4に対応。
(国土院 地理院地図をベースに筆者が作成)

図1 富山中心市街地で対象とする都市環境事例の位置

表4 富山中心市街地で対象とする都市環境事例の概要

1 富山城址公園	富山藩前田家の居城・富山城の城跡を整備された公園。昭和30年代に整備が完成していたが、2004年に中心市街地活性化の観点からの基本計画がなされ、改修整備が進められた。
2 富山県富岩運河環水公園	富山駅北地区にあり、富岩運河の牛島町側の船溜まりを整備した都市公園。とやま都市 MIRAI 計画のシンボルゾーンとして整備された。1997年開園。
3 富山駅	北陸新幹線、高山本線、あいの風とやま鉄道線が乗り入れる。2015年の北陸新幹線開業を機に、駅舎再整備、連続立体交差、駅前広場、自由通路、路面電車接続などの事業が行われている。
4 TOYAMA キラリ	旧富山大和(百貨店)跡地に建設された、富山市立図書館本館、富山市ガラス美術館、富山第一銀行本店などが入居する建物。2015年開館。RIA・隈研吾・三四五設計共同設計。
5 富山県美術館(TAD)	富岩運河環水公園内にある美術館。20世紀の美術品、日本作家のポスター・椅子などデザイン作品を鑑賞できる。2017年開館。内藤廣建築設計事務所設計。
6 オーバード・ホール	富山市芸術文化ホール。富山駅北にある多目的劇場施設。1996年開館。久米設計設計。
7 グランドプラザ	中心市街地活性化基本計画に盛り込まれたガラスの屋根付き広場。二つの再開発ビル間の市道を拡張して広場化し、道路指定を解除。現在は、株式会社富山市民プラザまちづくり事業部が管理・運営する。2007年開館。
8 富山ライトレール(ポートラム)	富山駅北から岩瀬浜を結ぶLRT。JR西日本富山港線を譲り受け、日本初の本格的LRTとして再整備。2006年開業。
9 富山地方鉄道環状線(セントラム)	富山駅と商業中心地区を巡回するLRT。一部軌道を新設し、既存の路面電車軌道と合わせて1周約3.4kmの環状線化した。2009年開業。
10 市内電車(市電)	富山市内で富山地方鉄道が運営する路面電車。1913年に日本海側初の路面電車として開業。
11 大手モール	富山城址公園から南に延びる通り。セントラムの開業に合わせて、都心部の顔となるトランジットモールの景観形成を目指して整備された。

3. 富山市中心市街地の都市環境要素

3-1. 対象とする都市環境要素

都市環境については、既往研究¹⁾でも重要性が指摘されており、またコンパクトなまちづくりに代表されるように今日の都市政策で重点が置かれている中心市街地の都市環境を対象とする。

富山市の都市整備部等で長年まちづくりに携わってきた元職員及びまちなかの屋根付き広場グランドプラザ運営を担当する職員（当時）に中心市街地の都市環境に関するインタビュー調査を行った（2017年3月）。特に、2000年前後からの「歩いて暮らせるまちづくり」に始まる富山市の中心市街地を見直す方針とそれに伴う整備の経緯について聞いた。その中でキーポイントとなる事例として言及された富山城址公園、グランドプラザ、大手モール、富山ライトレール、富山地方鉄道環状線、富山駅、TOYAMA キラリに、プレアンケート調査（2-2）で挙げられた富山県富岩運河環水公園、富山県美術館、オーバード・ホール、市内電車を加えて、表4・図1の11事例を富山市中心市街地の都市環境事例として、本アンケート調査に用いる。

3-2. シビックプライド調査概要

都市環境及び都市に関わるその他の要素がシビックプライドにどのように影響するのかを調べるための本アンケート調査を表5の要領で実施した。

中心市街地の都市環境については3-1の11事例を用い、その他の富山地域の要素については、2-2の9事例を用いた。誇りにについては、「(事例名)を市民として誇りに思う」という文章に対して、1.あてはまらない、2.あまりあてはまらない、3.どちらともいえない、4.ややあてはまる、5.あてはまる、の5件法で回答を求めた。

また、シビックプライドを多面的に測るために、伊藤¹⁾で用いられているシビックプライド尺度を用いた。ただし、「地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができていない」については、記述文が逆転項目で直観的にわかりにくい表現であることが結果に影響した可能性が示唆されていたため、「地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができていない」という質問に変更した。また、アイデンティティに関する尺度の「(地区)の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である」については、本研究では地区を考慮しないため削除し、場所

アイデンティティの尺度²⁾を参考に「富山地域は自分にとって特別な場所である」を加えた。シビックプライド尺度についても同様に、各項目について、1.あてはまらない～5.あてはまる、の5件法で回答を求めた。

3-3. 調査結果

3-3-1. 都市環境に対する市民としての誇り

図2に都市環境事例に関する本アンケート調査結果の概要を示す。いずれの事例も認知度（「知っている」と回答した割合）は80%を越えており、多くは90%を越えていた。いずれも市民認知度の高い事例であると言える。83.8%で最も認知度の低かった富山県美術館は、2017年8月開館で、調査時点で開館から半年と日が浅いため認知度が比較的低かったものと推察される。なお、「一つも知らない」という回答が3件（0.5%）あった。

グラフは「市民として誇りに思う」度合い（1.あてはまらない～5.あてはまる）の内訳を示し、その平均値が「誇り平均」である。富岩運河環水公園が最も高い平均値を示した。これは、プレアンケート調査において都市環境要素として最も多く名前が挙がったこととも整合している。次いで、市内電車、富山地方鉄道環状線、富山ライトレールの路面電車系の3種の公共交通が総じて平均値が高く、誇りに思わない（1や2の回答）の割合が少ないことも特徴的であった。プレアンケート調査では、富山地方鉄道環状線（セントラム）を挙げた回答者は相対的に少なかったが、本アンケート調査では他の2交通事例とほぼ同様の誇り平均値を示している。最も新しい事例である富山県美術館が路面電車系3交通とほぼ同等の平均値を得ている。一方で、大手モールが2.91と最も低い誇り平均値を示した。近年街路の空間機能が見直されつつあるが、長年通行機能が重視さ

図2 都市環境事例の誇り度合いと認知度

図3 都市環境以外の事例の誇り度合いと認知度

表5 本アンケート調査の概要

調査時期	2018年2～3月
調査対象	富山市内に居住する15歳以上のインターネット調査会社 ¹⁾ モニター
サンプル数	600人（男性365人、女性235人、最年少16歳、最年長86歳）
主な質問項目	回答者属性（富山市内居住年数、居住地区など）、中心市街地への訪問に関する質問、中心市街地の都市環境要素に対する認知及び評価・選好・推奨・誇りの度合いなど、富山地域の要素に対する選好・推奨・誇りの度合いなど、シビックプライド尺度

れてきた日本の都市において、街路空間が都市・地域の誇るべき対象として捉えられていないとも考えられる。

3-3-2. 都市環境以外の要素に対する市民としての誇り

図3に都市環境以外の事例に関する本アンケート調査結果の概要を示す。いずれの事例も認知度は概ね80%を越えており、いずれも市民認知度の高い事例であると言える。鋳物（産物）のみ認知度が79.8%とわずかに80%を下回っていたが、鋳物産業の中心は高岡市であることが影響していると考えられる。なお、「一つも知らない」という回答が4件（0.7%）あった。

「市民として誇りに思う」度合いのグラフと誇り平均から、立山連峰（自然）が最も高い結果となった。これは、プレアンケート調査において半数近い回答者が立山連峰を挙げたこととも整合している。次いで高い結果となった魚介類（食）についても同様である。立山連峰（自然、誇り平均4.41）、魚介類（食、誇り平均4.31）、米（産品、誇り平均4.08）、ます寿し（食、誇り平均3.99）は、都市環境事例で最も高かった富岩運河環水公園（誇り平均3.84）より高い値を示しており、米は産品要素ながら農作物だということを踏まえると、市民として誇りに思うのは自然と食に偏っていることがわかる。

3-3-3. シビックプライド尺度

表6にシビックプライド尺度の調査結果概要を示す。逆転項目については、逆転済みの値としている。最も平均値が高いのは「富山地域は住みやすいと思う」、次いで「富山地域が好きだ」「富山地域は大切だと思う」となっており、地域愛着を想定した尺度が総じて高い結果となっている。一方、平均値が低い方から「自分は地域社会に変化を起こすことができると思う」「地域社会を良い場所にするための

自分なりの貢献ができていると思う」「自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う」となっており、地域参画を想定した尺度が総じて低い結果となっている。

4. シビックプライドの源泉とシビックプライドの要素

4-1. シビックプライドの源泉の因子分析

シビックプライドの源泉の因子を抽出するために、富山市中心市街地の都市環境及び富山地域のその他の要素に対する「市民として誇りに思う」度合いで因子分析を行った。

表7 シビックプライドの源泉の因子分析結果

	因子			
	1	2	3	4
大手モール	.928	-.033	-.024	-.054
グランドプラザ	.920	.062	-.103	.004
オーバード・ホール	.867	-.049	.075	-.059
富山県美術館	.655	.022	.107	.071
TOYAMA キラリ	.641	-.020	.153	.075
富山駅	.604	.050	.032	.122
富山城址公園	.525	.017	.130	.110
富岩運河環水公園	.344	.281	-.082	.279
魚介類（食）	.048	1.020	-.152	-.035
米（産品）	.086	.895	-.057	-.033
ます寿し（食）	.117	.647	.249	-.113
立山連峰（自然環境）	-.244	.617	.196	.168
おわら風の盆（祭り）	-.172	.196	.687	.118
山王まつり（祭り）	.233	-.121	.654	-.007
製菓・売菓業（産業）	-.037	.262	.642	.044
鋳物産品	.099	.254	.602	-.105
富山グラウジーズ（スポーツ）	.282	-.135	.598	-.051
富山地方鉄道環状線	.040	-.047	.001	.963
富山ライトレール	.070	.012	-.055	.940
市内電車	.116	.037	.116	.599

因子抽出法：最尤法
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表6 シビックプライド尺度の平均値

	シビックプライド尺度	平均値
地域愛着	1. 富山地域は住みやすいと思う	3.94
	2. 富山地域が好きだ	3.86
	3. 富山地域の雰囲気や土地柄が気に入っている	3.66
	4. 富山地域に自分の居場所はない*	3.83
	5. 富山地域にずっと住み続けたい	3.70
	6. 富山地域は大切だと思う	3.85
	7. 富山地域にいつまでも変わって欲しくないものがある	3.67
	8. 富山地域になくなってしまうと悲しいものがある	3.73
忠誠的愛郷心	9. 富山地域は、他のほとんどの地域より良い場所である	3.33
	10. 富山地域を批判している人がいたら、富山地域を擁護する	3.44
	11. 友人や家族に富山地域の産品や製品を使うよう勧める	3.27
	12. 富山地域のスポーツチームを積極的に応援する	2.89
地域参画	13. 地域社会の一員としての責任を真剣に考えている	3.00
	14. 自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う	2.74
	15. 地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができています	2.69
	16. 自分は地域社会に変化を起こすことができると思う	2.46
地域アイデンティティ	17. 人生の大部分が富山地域に結びついている	3.34
	18. 「富山の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である	2.76
	19. 富山市民であることは自分にとって重要なことである	2.97
	20. 富山地域は自分にとって特別な場所である	3.39

表8 シビックプライド尺度の因子分析結果

	因子			
	1	2	3	4
2. 富山地域が好きだ	.998	.031	-.079	-.043
3. 富山地域の雰囲気や土地柄が気に入っている	.974	.079	-.048	-.070
1. 富山地域は住みやすいと思う	.906	.128	-.148	-.102
5. 富山地域にずっと住み続けたい	.707	-.078	.216	-.006
6. 富山地域は大切だと思う	.669	-.046	.089	.212
4. 富山地域に自分の居場所はない*	.651	-.247	-.058	.005
9. 富山地域は、他のほとんどの地域より良い場所である	.431	.148	.205	.146
10. 富山地域を批判している人がいたら、富山地域を擁護する	.392	.053	.352	.141
14. 自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う	-.045	.975	-.032	-.006
16. 自分は地域社会に変化を起こすことができると思う	-.088	.966	-.096	-.015
15. 地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができています	.030	.904	.022	-.041
13. 地域社会の一員としての責任を真剣に考えている	.029	.651	.178	.072
12. 富山地域のスポーツチームを積極的に応援する	.071	.391	.195	.070
19. 富山市民であることは自分にとって重要なことである	-.020	.111	.950	-.137
18. 「富山の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である	-.154	.268	.754	-.072
17. 人生の大部分が富山地域に結びついている	.039	.015	.699	.022
20. 富山地域は自分にとって特別な場所である	.291	-.071	.629	.033
11. 友人や家族に富山地域の産品や製品を使うよう勧める	.143	.229	.323	.220
8. 富山地域になくなってしまうと悲しいものがある	.023	-.028	-.042	.938
7. 富山地域にいつまでも変わって欲しくないものがある	.029	.023	-.097	.908

因子抽出法：最尤法
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

* 逆転項目

その結果、表 7 の 4 つの主要因子を得た。第 1 因子は、路面電車系交通を除くすべての都市環境事例の因子負荷量が高いため「都市環境」とする。第 2 因子は、自然及び食と農産物である製品の因子負荷量が高いため「食・自然」とする。第 3 因子は、祭り、産業、工芸品である製品、スポーツチームといった人間社会の営みを色濃く反映した要素の因子負荷量が高いため「文化・産業」とする。第 4 因子は、都市環境事例の中でも路面電車系の交通機関 3 事例の因子負荷量が高いため「交通」とする。富山市中心市街地・富山地域のシビックプライドの源泉は、「都市環境」という人為のフィジカルな因子、「食・自然」という自然環境からもたらされた因子、「文化・産業」という人為の無形の営みの因子、「交通」という都市環境の中でも移動に特化した因子があることがわかった。

4.2. シビックプライド尺度の因子分析

シビックプライドの因子を抽出するため、シビックプライド尺度に対して因子分析を行った。その結果、表 8 の 4 つの主要因子を得た。伊藤¹⁾のシビックプライド尺度の因子分析と類似の結果となっており、それに倣って第 1 因子を「愛着」、第 2 因子を「参画」、第 3 因子を「アイデンティティ」、第 4 因子を「持続願望」とする。ただし、伊藤¹⁾では「持続願望」の因子負荷量が高かった「地域は大切だと思う」は、ここでは「愛着」の因子負荷量が高く、「参画」の因子負荷量が高かった「家族や友人に地域の産品や製品を使うよう勧める」は、ここでは「アイデンティティ」の因子負荷量が高い結果となり、今治の調査とは一部相違が見られた。また、新たに加えた「富山地域は自分にとって特別な場所である」は、当初想定通り「アイデンティティ」の因子負荷量が高い結果となった。

4.3. シビックプライドの源泉とシビックプライドの関係

都市環境を含むシビックプライドの源泉が、シビックプライドのそれぞれの側面にどのように影響するのかを知るために、共分散構造分析を行う。シビックプライドの源泉が、シビックプライドの各側面に影響し、シビックプライドの側面間でも影響関係があるというモデルを仮定する。ここで、シビックプライドの側面としては、4.2 で抽出されたシビックプライドの 4 因子を用いる。また、シビックプライドの源泉としては、4.1 で抽出された 4 因子の下位尺度得点を用いる。すなわち、各因子に対して、因子負荷量の高い（表 7 での網掛けに対応）事例群の誇りの度合いの平均値を算出して、これを下位尺度得点とする。下位尺度得点を用いる理由は、以下の通りである。本アンケート調査において、シビックプライドの源泉については、まず「知っている」と回答したものについてののみ「市民として誇りに思う」度合いを回答することになっている。それぞれの事例の認知度はいずれも概ね 80% 以上と高いものの、ひとつでも知らない事例のある回答者は 600 人中 260 人おり、欠損値が多くなる。こうした条件の下でより欠損値の少ない変数とするために、下位尺度得点を用いることとした。因子を潜在変数とする場合に比べて、下位尺度を観測変数

として用いる回帰分析では、尺度の信頼性が低い場合にパス係数のバイアスが大きくなることが指摘されている³²⁾。

そこで、各下位尺度の信頼性をクロンバックの α 係数で確認したところ、それぞれ「都市環境」が 0.93、「食・自然」が 0.90、「文化・産業」が 0.88、「交通」が 0.94 といずれも高い値を示し、信頼性が十分に高いことが確認された。したがって、本分析では下位尺度得点を変数とすることで生じるバイアスは十分に小さいと考えられる。なお、下位尺度得点を用いても欠損値が生じるため、共分散構造分析では、完全情報最尤推定法 (full information maximum likelihood method, FIML) を用いる。

共分散構造分析で得られたモデルを図 4 に示す。パスに付された値は標準化されたパス係数で、因果関係の影響の強さを表す。パスの太さは有意水準に従い、太いパスから順に有意水準 0.1%、0.5%、1%、5% を示す。有意水準 5% を満たさないパスは図中に示さない。モデルの適合度を表す指標は、CFI=0.906、RMSEA=0.093 (90%CI 0.089~0.098) であった。

シビックプライドの因子間の関係については、伊藤¹⁾を参考にしながら、いくつかの試行によって適合度が高くなるようなパスを引いた。愛着から持続願望へのパスについては既往研究¹⁾と同じであるが、ここでは、アイデンティティと参画が入れ替わって、愛着からアイデンティティ、アイデンティティから参画のパスを引くモデルを採用した。都市・地域に対する愛着がアイデンティティを形成し、アイデンティティを持てる都市・地域に対して参画する、というルートがあると考えられる。

図 4 から、シビックプライドの源泉として「都市環境」と「文化・産業」はシビックプライドの「アイデンティティ」「愛着」を高めることがわかる。「食・自然」は「愛着」「持続願望」を高める反面、「参画」には負の効果を及ぼしている。「交通」は「愛着」を高める。すべてのシビックプライドの源泉から「愛着」に正の影響が見られ、「愛着」は都市・地域に対するベーシックな感情であると考えられる。

「アイデンティティ」は「都市環境」と「文化・産業」のみから直接的な影響が見られる。これら 2 種のシビックプライドの源泉は、前述したようにフィジカルか無形かの違いはあるものの人為の因子であり、自分（たち）で作り出してきたものとして、「アイデンティティ」を強めると解釈することもできる。ただし、「交通」にはそうした効果は認められないため、今後、シビックプライドの源泉としての「交通」の性質を探っていく必要があるだろう。「都市環境」「文化・産業」は直接「参画」意識を有意に高めるわけではないが、「アイデンティティ」を介した間接係数は「都市環境」が 0.118、「文化・産業」が 0.147 となっており、間接的に「参画」を高めていると言える。

一方、シビックプライドの「愛着」の側面には、特に「食・自然」の影響が強い。既往研究³³⁾では持続願望は地域愛着の一部であるとされていることから、シビックプライドの源泉としての「食・自然」は特に愛着を高めると考えら

れる。農業・漁業・調理などは人為ではあるが、「自然の恵み」という言葉がしばしば使われるように、勝ち取ったあるいは作り出したものというよりは与えられたものであるという意識が強いと考えられる。そうした受け身の意識が「参画」に負の影響を及ぼしている可能性がある。

5. 総括と展望

本研究では、海外研究の文献調査と富山市を事例とした調査分析によって、何がシビックプライドの源泉になり得るかを求め、特にシビックプライドの源泉としての都市環境の性質を捉えるために、シビックプライドの源泉とシビックプライドの各側面との関係を明らかにした。本研究を通して得られた主な知見は以下の通りである。

- (1) 海外研究の文献調査から、特に都市環境、文化、スポーツなどがシビックプライドの源泉と捉えられていること、自然環境はシビックプライドの源泉と捉えられていないことがわかった。
- (2) 富山市の都市環境及びその他の富山地域の要素に対して「市民として誇りに思う」かどうかの調査から、自然（立山連峰）や食に対して「市民として誇りに思う」度合いが非常に高いことがわかった。これは、海外研究のシビックプライドの源泉の捉え方とは対照的である。
- (3) 富山におけるシビックプライドの源泉は、「都市環境」「食・自然」「文化・産業」「交通」の4つの因子から成り立っていることがわかった。シビックプライドの源泉としての「都市環境」と「文化・産業」はシビックプラ

イドの「アイデンティティ」「愛着」を高めること、シビックプライドの源泉としての「食・自然」は「愛着」「持続願望」を高め「参画」を低めることが明らかになった。

- (4) シビックプライドの源泉としての「都市環境」は、「文化・産業」と似通って、「アイデンティティ」への影響が特徴的であるが、これらは、与えられたものというよりは自分（たち）で作り出したものという性質が強いのではないかと考察された。

本研究の分析では、「文化・産業」に対する「都市環境」の特性が明確に捉えられなかったこと、また、シビックプライドの源泉としての「交通」の性質が明確に捉えられなかったことから、今後より詳細な調査・分析が求められる。

謝辞

本研究の調査にあたり、富山市役所、富山市民プラザ、まちづくりとやま（当時）等にご協力をいただきました。また、匿名の差読者からは貴重なご意見をいただきました。心から感謝いたします。本研究はJSPS 科研費 JP26420618の助成を受けたものです。

補注

- (1) 楽天リサーチ株式会社（当時）
- (2) アンケート調査に際して、「富山地域」とは概ね富山市ですが、厳密ではなく、あなたが「富山地域」だと思う範囲を想定してください。また、複数の問いで同じ回答になる場合があっても結構です。回答はできるだけ具体的にご記入ください。」と但し書きました。

図 4 共分散構造分析によるシビックプライドの源泉がシビックプライドを高めるモデル

参考文献

- ¹⁾ 伊藤香織 (2017), 都市環境いかにシビックプライドを高めるか: 今治市を事例とした実証分析, 都市計画論文集, 52(3), 1268-1275.
- ²⁾ 片山めぐみ (2010), 知床における住民の自然とのかかわりと居住地に対する誇りの意識の地域差, ランドスケープ研究 73(5), 771-777.
- ³⁾ 田原潤一, 後藤春彦, 佐久間康富 (2008), 特産物の地域ブランド化の現状と地域への影響に関する研究: 商標登録済みの水産物を対象として, 日本建築学会計画系論文集 73(625), 565-572.
- ⁴⁾ 谷口守, 松中亮治, 芝池綾 (2008), ソーシャル・キャピタル形成とまちづくり意識の関連, 土木計画学研究・論文集 25, 311-318.
- ⁵⁾ 芝池綾, 谷口守, 松中亮治 (2007), 意識調査に基づくソーシャル・キャピタル形成の構造分析: 地域への「誇り」や「信頼」がもたらす影響, 都市計画論文集 42(3), 343-348.
- ⁶⁾ Lois Brink and Bambi Yost (2004), Transforming Inner-City School Grounds: Lessons from Learning Landscapes, Children, Youth and Environments, 14(1), 209-233.
- ⁷⁾ Lily Kong (2007), Cultural icons and urban development in Asia: Economic imperative, national identity, and global city status, Political Geography 26(4), 383-404.
- ⁸⁾ Aspa Gospodini (2004), Urban morphology and place identity in European cities: built heritage and innovative design, Journal of Urban Design 9(2), 225-248.
- ⁹⁾ Cele Otnes, Jenny Yang, Behice Ece Ilhan, and Nicole Tami (2009), Consumer Mourning and Coping With the Loss of Strategic Rituals: the Case of Marshall Field & Co., Advances in Consumer Research 36, 688-688.
- ¹⁰⁾ Ian Lawley (2003), Local authority museums and the modernizing government agenda in England, Museum and Society 1(2), 75-86.
- ¹¹⁾ Awoniyi Stephen (2001), The Contemporary Museum and Leisure: Recreation As a Museum Function, Museum Management and Curatorship 19(3), 297-308.
- ¹²⁾ Harold Skramstad (2004), An agenda for museums in the twenty-first century, Gail Anderson, Reinventing the Museum: Historical and Contemporary Perspectives on the Paradigm Shift, Walnut Creek, Calif.: AltaMira Press, 118-132.
- ¹³⁾ Aiala Levy (2013), Stages of a state: from Sao Paulo's Teatro Sao Jose to the Teatro Municipal, 1854-1911, Planning Perspectives 28(3), 461-475.
- ¹⁴⁾ Nick Hayes (2012), 'Our Hospitals'? Voluntary Provision, Community and Civic Consciousness in Nottingham Before the NHS, Midland History 37(1), 84-105.
- ¹⁵⁾ Charlene A. Winters and Dorothy M. Mayer (2002), Special Feature: An Approach to Cardiac Care in Rural Settings, Critical Care Nursing Quarterly 24(4), 75-82.
- ¹⁶⁾ A. Goulding (2005), The Public Library: A successful Public Space?, Spaces, Spatiality and Technology, Springer, 45-64.
- ¹⁷⁾ Neil Pemberton (2017), The Burnley Dog War: The Politics of Dog-Walking and the Battle over Public Parks in Post-Industrial Britain, Twentieth Century British History 28(2), 239-267.
- ¹⁸⁾ Thomas K. Tiemann (2008), Grower-Only Farmers' Markets: Public Spaces and Third Places, The Journal of Popular Culture 41(3), 467-487.
- ¹⁹⁾ Sarah Law (2007), Liverpool/Calcutta Exchanges: William Roscoe's Reappraisal of the First Linnaean Order of Plants, Garden History 35(2), 180-196.
- ²⁰⁾ Timothy A. Gibson (2005), NIMBY and the Civic Good, City & Community 4(4), 381-401.
- ²¹⁾ Stacy Harwood and Dowell Myers (2002), The dynamics of immigration and local governance in Santa Ana, Policy Studies Journal 30(1), 70-91.
- ²²⁾ Bruce K. Johnson, John C. Whitehead, Daniel S. Mason, Gordon J. Walker (2012), Willingness to pay for downtown public goods generated by large, sports-anchored development projects: The CVM approach, City, Culture and Society 3(3), 201-208.
- ²³⁾ Richard Dagger (2003), Stopping Sprawl for the Good of All: The Case for Civic Environmentalism, Journal of Social Philosophy 34(1), 28-43.
- ²⁴⁾ Stefan Hoehne (2015), The birth of the urban passenger: Infrastructural subjectivity and the opening of the New York City subway, City 19:2-3, 313-321.
- ²⁵⁾ Steven J. Burian and Findlay G. Edwards (2002), Historical Perspectives of Urban Drainage, Ninth International Conference on Urban Drainage.
- ²⁶⁾ E. Feitelson (2002), Implications of shifts in the Israeli water discourse for Israeli-Palestinian water negotiations, Political Geography 21(3), 293-318.
- ²⁷⁾ John Preston and Cathie Hammond (2003), Practitioner Views on the Wider Benefits of Further Education, Journal of Further and Higher Education 27(2), 211-222.
- ²⁸⁾ David F. Labaree (2013), The power of the parochial in shaping the American system of higher education, Educational Research: The Importance and Effects of Institutional Spaces, Springer, 31-46.
- ²⁹⁾ Patrick Driscoll (2008), The Salisbury Annual Musical Festival 1770-1800: Provincial Culture in Transition, The Journal of the Social History Society 5(1), 33-52.
- ³⁰⁾ Sarah Thomasson (2012), The 'Jewel in the Crown'? The place of the Adelaide Festival in the Australian festival Ecology, A Journal of the Performing Arts 17(4), 145-148.
- ³¹⁾ Maeve Blackman (2011), Public art discourse: A case study of Gateshead, England, International journal of the Arts in society 6(3), 137-152.
- ³²⁾ Sarah Wakefield Colin McMullan (2005), Healing in places of decline: (re)imagining everyday landscapes in Hamilton, Ontario, Health & Place 11(4), 299-312.
- ³³⁾ Robert E. Mechanic (2003), What Will Become Of The Medical Mecca? Health Care Spending In Massachusetts, Health Affairs vol 22(6), 130-141.
- ³⁴⁾ Donald P. Roy (2008), Impact of New Minor League Baseball Stadiums on Game Attendance, Sport Marketing Quarterly 17(3), 146-153.
- ³⁵⁾ Douglas Goetsch (2011), Baseball's Loss of Innocence: When the 1919 Black Sox Scandal Shattered Ring Lardner's Reverence for the Game, the Great Sportswriter Took a Permanent Walk, The American Scholar 80(2), 82-95.
- ³⁶⁾ Andrew C. Holman (2009), Playing in the Neutral Zone: Meanings and Uses of Ice Hockey in the Canada-U.S. Borderlands, 1895-1915, American Review of Canadian Studies 34(1), 33-57.
- ³⁷⁾ Robert Baumann, Taylor Ciavarra, Bryan Englehardt and Victor A. Matheson (2012), Sports Franchises, Events, and City Livability: An Examination of Spectator Sports and Crime Rates, The Economic and Labour Relations Review 23(2), 83-98.
- ³⁸⁾ Scott Lasley and Joel Turner (2010), Home run or strikeout: The dynamics of public opinion on new sports facilities, The Social Science Journal 47, 853-864.
- ³⁹⁾ Megan Corrarino (2014), "Law Exclusion Zones": Mega-Events as Sites of Procedural and Substantive Human Rights Violations, Yale Human Rights and Development Law Journal 17(1), 180-204.
- ⁴⁰⁾ Douglas Michele Turco and Mihaela Sofia Dinu (2009), The Economic Significance of a Mountain Tourism Events: The Case of the 2009 "Ice Climbing World Cup Finals" in Busteni, Romania, Journal of Tourism Challenges and Trends 2(2), 11-20.
- ⁴¹⁾ Stephen Bocking (2005), The Nature of Cities: Perspectives in Canadian Urban Environmental History, Urban History Review 34(1), 3-8.
- ⁴²⁾ Tarina Jordaan and Karen Puren (2012), "We love this place": place attachment and community engagement in urban conservation planning, Challenges of Modern Technology 3(3), 39-45.
- ⁴³⁾ Angela Tregear (2007), Proximity and typicity: a typology of local food identities in the marketplace, Anthropology of food [Online], S2 March 2007. <http://journals.openedition.org/aof/438>
- ⁴⁴⁾ Kathleen Schroeder (2006), A Feminist Examination of Community Kitchens in Peru and Bolivia, A Journal of Feminist Geography 13(6), 663-668.
- ⁴⁵⁾ Clark L. Erickson (2008), Amazonia: The Historical Ecology of a Domesticated Landscape, The Handbook of South American Archaeology, Springer, 157-183.
- ⁴⁶⁾ K. AlRayyan, C. Hamameh, H. Sukkar, A. Ghaith, N. Abu-Jaber (2017), From Abandoned Mines to a Labyrinth of Knowledge: a Conceptual Design for a Geoheritage Park Museum in Jordan, Geoheritage. <https://doi.org/10.1007/s12371-017-0266-8>
- ⁴⁷⁾ David Carey, Jr. and Walter E. Little (2010), Reclaiming the Nation through Public Murals: Maya Resistance and the Reinterpretation of History, Radical History Review 2010(106), 5-26.
- ⁴⁸⁾ Tristram Hunt (2004), Building Jerusalem: The Rise and Fall of the Victorian City, Weidenfeld & Nicolson.
- ⁴⁹⁾ Tom Collins (2017), Governing through Civic Pride: Pride and Policy in Local Government, Eleanor Jupp et al., Emotional States: Sites and spaces of affective governance, 191-203, Routledge.
- ⁵⁰⁾ 朝日新聞 2019年4月13日夕刊 (東京本社) 「いっね! 探訪記 桜並木に癒やされ格別な一杯」.
- ⁵¹⁾ Aurore Marcouyeux and Ghazlane Fleury-Bahi (2011), Place-Identity in a School Setting: Effects of the Place Image, Environment and Behavior 43(3), 344-362.
- ⁵²⁾ 狩野裕 (2002), 構造方程式モデリングは、因子分析, 分散分析, パス解析のすべてにとって代わるのか?, 行動計量学 29(2), 138-159.
- ⁵³⁾ 鈴木春菜, 藤井聡 (2008), 「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集 D 64(2), 179-189.